様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３０１０６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１５６７

研究課題名（和文）ダイバーシティにおけるワークプレイス研究－多様性の中で、共に働くこと

研究課題名（英文）English

研究代表者
水川　喜文（Mizukawa, Yoshifumi）

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：２０２９９７３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、COVID-19による社会的制約の下、障害者や非母語話者と「共に働く」ことに対して、エスノメソドロジー・会話分析を用いたダイバーシティにおけるワークプレイス研究に関する知見を得ることとなった。障害者の共同実践に関しては、カフェの厨房における調理作業、視覚障害者による通勤の歩行訓練場面、科学技術研究所における発達障害者のワークプレイスデザインなどの調査を行い、非母語話者との共同作業に関しては、リモートワークする場面における、マルチモーダルな会話分析の調査研究を行い、その実践をエスノメソドロジー・会話分析の視点から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果の学術的意義は、共同作業をワークプレイスの研究として、同質性を前提として社会組織上の役割を組み合わせることではなく、多様性のある現場を前提として、それをいかに共同作業の実践の中で、偏在するリソースを調整しながら共に働いていくかという視点を取り入れることにより、現代社会における多様性の中の労働現場における、さまざまなリソース（言語、身体、道具、環境）を用いた「実践の論理」を明らかにした点である。これら研究は、日本社会において顕在化しつつある、ダイバーシティのなかの労働環境に関して、具体的な実践の文脈で共同作業のあり方を考察する上での一つの視点を提供するという社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：Adapting to the circumstances posed by COVID-19, this study conducted an investigation of diverse workplaces using ethnomethodology and conversation analysis to understand the practices of "working with" people with disabilities and non-native speakers.
Investigations included a cafe kitchen where people with disabilities participated in cooking operations, a gait training practice for visually impaired commuters, and a science and technology institute designing workplaces for people with developmental disabilities. For collaboration with non-native speakers, the study explored multimodal conversations in remote work settings, offering a distinct perspective on collaborative practices in the midst of a pandemic.

研究分野：社会学

キーワード：エスノメソドロジー　会話分析　ダイバーシティ　障害当事者　非母語話者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本社会において、ダイバーシティ／多様性がキーワードとなり危急の課題となっている。本研究がダイバーシティの中でも障害者、非母語話者を焦点としたのは、研究代表者・分担者のこれまでの研究蓄積に加えて、この日本社会の現代的課題のためである。水川ほか編(2017)『ワークプレイス・スタディーズ――はたらくことのエスノメソドロジー』は、これまで個々に独立してなされてきたワークプレイスの研究をひとつのまとまった研究群と捉えることを提案した。これを踏まえ、ワークプレイス研究の前提を同質性のある社会組織とするのではなく、多様性のある現場を前提として、それをいかに共同作業の実践に結びつけていくかという視点を持つべきと考え、本研究を着想した。

２．研究の目的

本研究では、エスノメソドロジー・会話分析の知見を用いた「ワークプレイス研究」の射程を、ダイバーシティにおけるさまざまな共同作業の実践に適用することにより、その社会的相互行為やローカルな秩序における「実践の論理」を明らかにすることを目的とする。本研究は、さまざまなダイバーシティの中でも、障害者や非母語話者との共同作業の実践研究へと展開し、「共に働く実践」の「ワークプレイス研究」によって、現代社会における多様性の中の労働現場における、さまざまなリソース（言語、身体、道具、環境）を用いた「実践の論理」を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究はダイバーシティ（多様性）の中でも障害者、非母語話者を対象とするフィールドを選定して、その中で共同作業の場面を調査し、そこでさまざまなリソース（言語、身体、道具、環境）を用いて実践される社会的相互行為やローカルな秩序を明らかにした。この際のデータとしては、ビデオデータを用いてエスノメソドロジー・会話分析的に調査した。そのなかで、例えば、共同作業におけるカテゴリー使用（H. Sacks)、制度的場面への会話分析（J. Heritage）などをふまえた、具体的な会話や相互行為のデータに基づいた議論を行い、その結果としてワークプレイス研究としての成果を融合していくという方向をもつことで、調査の技術的な側面はもとより、理論的方法論的な考察を行った。

４．研究成果

本研究は、COVID-19 による社会的制約に対し、その時々において適切な対応することにより、現地調査のフィールドを調整し、また、リモート環境を対象とすることで、次に示すような、障害者や非母語話者と「共に働く」ことに関して、エスノメソドロジー・会話分析のダイバーシティのワークプレイス研究として実施した。

（１）障害者を含むワークプレイスの研究

障害者の共同実践に関するワークプレイスの調査研究については、関係する NPO 等と連携して、COVID-19 の状況や研究倫理に配慮して調査を実施することで、次に列挙するようなフィールドで、論文・書籍の公刊、国内学会等における発表を行った（海老田 2023 ほか)。

(a)カフェの厨房における調理作業の共同実践に関しては、「プランの個別化」、「オムニレリバント・カテゴリーとしての調理者」など重要なキーワードが析出された。 (b)科学技術研究所における発達障害者のワークプレイスデザイン調査を行い、障害者を含む共同作業のダイバーシティとして、それぞれの作業者にとっては自律的ではあるが、研究所における作業としてみてみると共同実践であるという両面が備わっていることが明らかになった。(c)視覚障害者が職場に単独歩行で通勤するための歩行訓練場面については、どのように歩行訓練士のディレクションを伴って共同作業しているかという観点で分析した。以下にそれぞれの成果についてまとめる。

(a) カフェの厨房における調理作業の共同実践の調査

本調査は、水川喜文（北星学園大学）を中心に行われ、障害者と共に働くワークプレイスである「カフェの厨房」を調査対象のフィールドとして、エスノメソドロジー的な視点から、その場所におけるローカルな社会秩序がどのように成し遂げられているかを明らかにすることを目的とした。このフィールドとして選ばれたランチなどを提供するカフェの厨房では、ビデオ撮影やインタビューを伴う形で調査を実施した。この調査は、所属機関の倫理規定に従って実施され、研究倫理に関する十分な説明を対象者に対して行い、その同意を得た。

昨今、ダイバーシティの課題として障害者の就労が注目され、ダイバーシティ・マネジメントによって既存の組織文化と制度の見直しや変革が行われている。一方で、障害者の就労は人権尊重や法令順守、社会正義などの社会的観点を経営的視点と並置して捉え、全ての従業員の潜在能力を活かす職場環境作りというダイバーシティ・マネジメントの理念として捉えられる一面がある。この方向を推進するにあたり、障害をもつ社員の潜在能力を最大限に活かす職場環境作りのためには、障害のない社員や管理者・経営陣の無知・無関心と障害のない社員むけにデザイン

された物的環境と制度の見直しや変革が必要である。
本調査においてフィールドとして選択した社会福祉法人が運営するカフェの厨房には、障害をもつスタッフが5〜7人程度、障害を持たないスタッフが4人程度、働いている。その中には、軽中度の自閉症スペクトラム、ダウン症候群などの特性を持つ人も含まれている。このカフェでは、大皿の料理が複数陳列され、客はその中から数品選んでランチとして提供される。そして、障害を持つスタッフと持たないスタッフが共同で作業を行う厨房内では、調理分担、作業フロー、障害を持つスタッフと障害を持たないスタッフの関係などが、次のような意味で特徴的であることが観察できた。
このカフェのスタッフは、元々障害者主体の介助を行う組織の職員で、障害者の調理作業において、調理の工程の一部を分割して担当する場合、調理者が達成感を得にくいと感じていた。そのため、カフェを開業する際に、各人がそれぞれ料理を担当する料理の「全工程担当制」を導入した。
このフィールドにおける「全工程担当制」方式では、各調理者（障害を持つスタッフ・持たないスタッフ）は、ひとつひとつの料理の全工程を担当する。ここでは障害を持つ・持たないを問わず、ひとりの調理者は、ひとつの料理を、素材の選定、カットから調理、片付けまですべての工程を任されることになる。一方で、他の多くの料理を含む事業所では分割担当制が多く見られ、障害者は作業工程を一部分割して担当することが一般的である（例：野菜を切る、炒める、皿を洗うなどの個々を各人に分担する作業分担制）。そのメンバーは作業の遅延に対する個別の責任を負うと共に、全体の遅延に対する連帯責任を負う。その際、障害を持たないスタッフは障害を持つスタッフの作業を管理し、指導する。ここではカテゴリーの非対称性が顕在化する。
一方で、この全工程担当制とはどのようなものだろうか。まず、ホワイトボードには担当料理名や料理の工程を示すメニュー（レシピ）が書かれ、これが各人のプラン（Suchmanによる概念）となる。このプランを通じて行為の過程が可視化され、時系列に位置づけられる。そして、その時系列が参照されるプランに沿って作業が個々になされることになる。この際、障害を持つスタッフと持たないスタッフは、対称的な「調理者」としてカテゴリー化される。すなわち、障害を持つ・持たないスタッフの非対称性が発露するのは、サポートを行う際（のみ）であり、それ以外の時は、全員が同じ調理者として認識されることになる。調理作業の中心には各人のワークフローがあり、アドホックなサポートが可能となる。障害を持たないスタッフは、自身の担当料理を作りながら、障害者スタッフ(2名)の作業をモニターし、必要なときにのみサポートを提供する。このサポートの担当者は、作業の進行に合わせて調整される。
このように、このワークプレイスでは、すべての成員が一つの料理の全工程を担当することにより、作業工程の見通しを確保するようデザインされている。各人が同じ調理者としてカテゴリー化され、必要なときにのみ非対称性が発露する形でアドホックなサポートが提供される。
また、その際、個別作業はプランの中の時系列に位置づけられ、協調のセンターであるホワイトボードから時間的秩序が放たれ、分散した形で実践の秩序が形成される。個別作業の中断や混乱は、カテゴリーの非対称性を発露させ、アドホックな支援が開始される。その後、再び秩序が整えられ、個別のプランの中に位置づけられる。
このような共同作業における分担のマネジメントとカテゴリーの配置により、ローカルな社会秩序が遂行される。これらは、障害者と共に働くというダイバーシティにおけるワークプレイスの代替的方法として例証することができる。

(b) 科学技術研究所における発達障害者のワークプレイスデザインの調査
本調査は、海老田大五朗（新潟青陵大学）を中心として行われ、フィールドとして、1970年代創立のF技術研究所を設定した。主に道路舗装技術や材料開発、品質管理・構造開発、施工管理システムの構築などを手がけるこの研究所では、約30名の従業員のうち4人が発達障害を持つ。彼らの職務内容は、実験材料の調達や仕分け、測定・データ取り、ドローンの操作、現地測定など多岐にわたる。
まず、このフィールドで注目すべきは、職場デザインの重要性である。すなわち、作業の教示とそれに従う行為、指示書や測定器具の配置など、細部に渡るデザインが発達障害者の自律的な就労を可能にしている。上司がコーディネートする要素も重要で、作業方法を教示する、道具を用意するなどが含まれる。しかし、これらは障害を持つ者に特有の配慮ではなく、障害を持たない者も同様の条件で作業を行っている。
また、自律的と非自律的な働き方の違いも注目に値する。例えば、Mさん（発達障害者）の場合、上司の指示を待たずに一貫した作業をこなすことは自律的な働き方と言える。一方で、職場で使用する道具や文書のデザインが教示的に設計され、それらに従っていると見るなら、非自律的な働き方とも言える。これは、自律とは、単に「教示に従うこと」かどうかで見方が変わる。すなわち、ここではデザインとしては教示的ではあるが、そのデザインをふまえることによって当事者が自立的に活動を行えるという状況を生み出しているのである。
以上のように、本調査において、科学技術研究所において、発達障害者が自律的に働くことを可能にするのは、ワークプレイスデザインであることが示されてきた。そのデザインの中でも、このフィールドにおいては、指示書や測定器具の配置が特に重要といえる。これは細部まで詳細な教示と教示に従う行為、そしてそれらの秩序が埋め込まれたデザインがなされている。そのようなデザインがなされているがゆえに、働く人による「自律的な」働き方が発揮されているとも

いうことができ、自立と非自立という単純な対比によらないワークプレイスの実践が明らかにされたといえよう(海老田 2023 など)。

これらをふまえて、科学技術研究所で働く知的・発達障害者たちは、朝のミーティングで指示を受けた後、終日自律して仕事を遂行することについて考察した。彼らが従事する業務は主に、実験してデータ収集するための「テストケース」の作成などであり、たとえば、「ある素材は道路舗装のための材料として一定の基準を満たしているか」「ある素材を加工することでどれくらいの強度が得られるのか」というような問いを確かめるためのテストケースや、その基礎実験をである。

自律性に関しては、何度も転職を経験した M さんが 10 年近く勤め続けていることにも注目した。M さんの就労に関しては、自己認識や障害受容、職業訓練や SST などのトレーニングと成長、給与、家族のサポートや専門職者のサポート、ナチュラルサポートなど、さまざまな要素がその就労を支えている。しかし、それらの要因をリスト化すると、項目は無限に増えてしまう。それよりもむしろ、会社の中に「自分の居場所がある」という点に本調査では重要性を見出した。この研究所では、職業リハビリテーションのマニュアルにあるような「仕事の切り出し」とは異なる就労移行支援の方法を用いている。この広い研究所の中で、特に時間的なノルマは厳しくなく、M さんはほとんど一人で仕事をする時間が多い。これは道路工事現場とは明らかな対照である。一方で、科学技術研究のためのデータ収集や基礎実験という、変数を統制するための条件が数多く与えられているワークプレイスである。そのために使用する道具も厳格に規定されている。何のためにどのような手段が使われなければならないのかが、あらかじめ設定されている。このように、科学技術研究の方法によって規定されるワークプレイスデザインが、ADHD（不注意・多動）の特性をもつ M さんの就労定着を可能にする機序となっている。すなわちこれは、それぞれの人が組織内で必要とされるように作業と組織がデザインされていることを示している（海老田 2020：1 章と 2 章、)。

このように本調査では、F 技術研究所をフィールドとして取り上げ、ワークプレイスについての細部にわたるデザインが発達障害者の自律的な就労を可能にしていることを示した。具体的には、教示や作業手順、道具の配置などが組織的に整えられていることである。そして、そのデザインが障害を持たない者と発達障害を持つ者の両方に適用され、一貫した作業を効率的に進めることを可能にしている。また、自立と非自立の働き方については、ワークプレイス・デザイン自体によう教示(instruction)が、当事者の自立的な活動を可能にしていることを示した。。そして、発達障害者が自立して仕事を進められる研究所環境は、職業リハビリテーションの「仕事の切り出し」という手法とは異なる就労移行支援の方法を示しており、就労における自立の概念に対して新たな視点を提供するものである。

(c) 視覚障害者による通勤にための歩行訓練場面の調査

本調査は、秋谷直矩（山口大学）を中心に実施され、視覚障害者が職場に単独歩行で通勤するための歩行訓練場面のデータの分析である。データは本研究スタート以前より収集していたものだが、本科研のテーマに合致するため、その分析を進めることとして、晴眼者の知覚を基盤にデザインされた道路環境のさまざまな人工物（信号、横断歩道など）を、視覚障害者が歩行訓練士のディレクションのもと、どのように理解し、自身の歩行の資源とするのかという観点からコレクションの作成と分析を行った。

本調査では、X 市内を歩行訓練の舞台とし、その過程で生じる視覚障害者と歩行訓練士のインタラクションが詳細に記録された。具体的には、視覚障害者の B 氏が歩行訓練士の指導のもと、X 市営地下鉄の C 駅から Z までの通勤経路を 2 日間にわたり単独歩行する過程が観察された。

X 市には視覚障害者用の信号が設置されており、青信号時には東西方向では「カッコー」、南北方向では「ピヨピヨ」という音がする。近郊の市では、交通量の多い幅広の道路（主道）では「カッコー」、交通量の少ない狭い道路（従道）では「ピヨピヨ」の音がする。この擬音式の信号が最も多く設置されているが、一部でメロディー式（「通りゃんせ」「故郷の空」）が使われている場所もある。

歩行訓練の様子は、視覚障害者の B 氏の職場である X 市の Z への通勤経路を中心に記録された。Y ライトハウスに依頼して、自宅最寄り駅 C 駅、そこから Z、そして F 駅へと続く経路を単独歩行できるようにすることを目指して、2 日間の訓練が行われた。

歩行訓練士は、当日の B 氏との交流や行動を観察して、その障害の程度や歩行に関する能力・知識を評価していた。このデータでは、信号音についての知識を得て、その知識を自身が存在する環境に適用し、単独歩行を可能にする学習過程に焦点を当てている。

訓練の初日と 2 日目には、それぞれ「AB ルート」と「CD 学校ルート」が利用され、二つのルートを交互に使用した。C 駅を出て、B 氏が Z に向かうには、この 2 つのルートから選択することができる。どちらを選んでも、横断歩道を渡る必要がある。B 氏が CD 学校ルートの横断歩道に近づいたとき、信号音と渡ろうとしている横断歩道の信号の状態を一致させることができないことが観察され、そこから信号音についての学習が始まった。

訓練士の役割は B 氏の歩行能力や知識を理解し、適切な指導を行うことで、B 氏が独自の歩行の資源を発見・活用する手助けをすることであった。具体的には、「AB ルート」と「CD 学校ルート」の 2 つのルートの信号と横断歩道を利用する際の訓練が中心であった。その中で、B 氏は信

号音の違いを理解し、それを自身の道路渡りに適用することで単独歩行を実現するための学習を進めていた。この結果、視覚障害者がどのように晴眼者向けのインフラを理解し、活用するかについての洞察が得られたと同時に、それらが歩行訓練の中で教示され、組織だったものとして理解され実践されるという過程を分析することができた。

（2）

非母語話者との共同作業を行うワークプレイスに関する調査は、研究協力者である Tomasine, Joseph（北海道文教大学）、柳町智治（北星学園大学）を中心に実施された。母語を共有しない人々がリモートワークする場面（英語と日本語を使う会議）のデータを取得し、マルチモーダルな会話分析の調査研究を行った。多言語ワークプレイスにおける相互行為のローカルな展開は、各ターンの終盤の要素に依存する傾向がみられた。これらの言語多様性に関する会話分析は、国際学会(AAAL)等において発表された。

非母語話者との共同作業が行われているワークプレイスに関しては、日本語、英語、中国語を母語とする数名が職場でのオンライン会議において英語と日本語を使い分けながら相談を行う場面の動画データを数回にわたって収録し、それをもとにマルチモーダルな会話の分析考察を行った。言語と出身地を異にする者が二言語（日英）を併用しながら行う会議の様子を分析していく中で特に注目したのは、一人のメンバーが他のメンバーによる先行発話末の一部を小さな声で繰り返す現象である。たとえば、一人の教員が「ある状況下ならオンラインで XY ができる」という趣旨の見解を母語でない日本語で述べた直後に、それを聞いていた別の日本語非母語話者が先行発話の末尾の言語形式を「できる」と繰り返して発話するような例である。

こうした現象はデータ中に繰り返し見られ、本研究ではこの現象を含む会話断片を集め分析を行った。その際に依拠したのは、エスノメソドロジーと相互行為言語学における方法論である。エスノメソドロジーはワークプレイスの各メンバーがオンライン会議に参加する上で当該コミュニティの規範にどのように志向し交渉するのかを検討していく際に参照した。また、近年の相互行為言語学・会話分析では、本研究データの例のように参加者が他の参加者の発話を繰り返すことでその行為を取り入れるふるまいをレジスタリング(registering)と呼び、一定の相互行為上の実践であるとしている(Sorjonen 1996; Schegloff 1997; Persson 2015; Rossi 2020)。これらの領域での知見をもとに、本研究では多言語ワークプレイスでの会議におけるレジスタリングの実践が他参加者への「alignment and affiliation」 (Stivers 2008)となり、さらには言語の選択と包含に志向しつつ会話進行の調整を可能にするものとして考察を行った。

これまでのワークプレイス研究では、参与者による言語的実践の詳細に対する会話分析的な検討が十分されておらず、また語用論の研究はモノリンガルな言語環境における言語使用を主に分析の対象としてきた。そこで、本研究では、多言語環境のワークプレイスにおける相互行為の組織化やレジスタリングという言語的実践の解明を中心に分析を進めた。すなわち、多言語ワークプレイスに生じる言語的要請とアフォーダンスがどのような相互行為上の規範をもたらすのか、本研究の意義はこうした点を分析、考察した点にある。

以上の言語多様性をめぐる会話分析の成果は米国応用言語学会(AAAL)大会において発表され、ダイバーシティを掲げたワークプレイス研究の方法論的研究・応用可能性の研究を進め成果の公刊に向けて作業を行っている。

この他、さまざまな社会状況の制約のため未達成となった調査がいくつかある。例えば、多様な非母語話者が協働するスモールオフィスにおける共同作業と言語実践、東南アジアから来日した技能実習生による社会福祉法人における障害者介護の共同実践、マスメディアに現れた在外就業者の多言語ワークプレイス認識の歴史的変遷などである。これらを含めて本研究のテーマは今後もさらに開拓可能なものであると考える。

これらをふまえて本研究を総括的にまとめると、COVID-19 を含めた社会状況の制約のある中において、ダイバーシティを掲げたワークプレイス研究の方法論的研究・応用可能性の研究を進めることで、障害者や非母語話者と「共に働く」フィールドにおいて、可能な限り研究成果を公刊し、当該研究領域に対して一定の知見を提起したと考える。

参考文献

海老田大五朗(2020)『デザインから考える障害者福祉－ミシンと砂時計』、ラグーナ出版

海老田大五朗(2023)「「見守り」を可能にするもの： 精神障害者就労継続支援 A 型施設で使用される「日報」の分析」『日本保健医療社会学論集』34,掲載頁未定

水川喜文・秋谷直矩、五十嵐素子編(2017)『ワークプレイス・スタディーズ――はたらくことのエスノメソドロジー』、ハーベスト社

Persson, R. (2015). Registering and repair-initiating repeats in French talk-in-interaction. Discourse Studies, 17(5), 583-608. doi:10.1177/1461445615590721

Rossi, G. (2020). Other-repetition in conversation across languages: Bringing prosody into pragmatic typology. Language in Society, 49(4),495-520. doi:10.1017/S0047404520000251

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 海老田 大五朗	４．巻 53(3)
２．論文標題 COVID-19の影響と障害者就労支援のデザイン	５．発行年 2020年
３．雑誌名 看護研究	６．最初と最後の頁 411-417
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 海老田 大五朗	４．巻 13(2)
２．論文標題 学習に困難のある学生へのメディア教育実践における時間と空間のデザイン	５．発行年 2020年
３．雑誌名 新潟青陵学会誌	６．最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柳町 智治	４．巻 27
２．論文標題 車椅子使用者による乗車券購入場面の相互行為分析： 活動の進行と介助をめぐる実践的課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 認知科学	６．最初と最後の頁 487～498
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2020.052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榎本 美香、飯窪 真也、柳町 智治、松島 恵介、坊農 真弓、中根 愛、山下 愛実、大塚 裕子、三野宮 定里、土倉 英志、堀内 隆仁	４．巻 27
２．論文標題 特集を振り返って：著者の想い（ 小特集: 「生きる」　リアリティと向き合う認知科学へ・その後）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 認知科学	６．最初と最後の頁 499～508
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2020.059	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂井 志織，秋谷 直矩，高梨 克也，藤井 真樹	4．巻 14
2．論文標題 つながりの再構築に向けて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shitsuforum.14.0_91	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 海老田大五朗	4．巻 34
2．論文標題 「見守り」を可能にするもの：　精神障害者就労継続支援A 型施設で使用される「日報」の分析	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 00-00
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 海老田大五朗
2．発表標題 精神障害者たちの労働時間と健康管理をマネジメントする文書
3．学会等名 第46回日本保健医療社会学会大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 海老田大五朗，秋谷直矩，河村裕樹
2．発表標題 『デザインから考える障害者福祉――ミシンと砂時計』合評会
3．学会等名 日本保健医療社会学会 2021年度第1回関東定例研究会
4．発表年 2020年

１．発表者名 海老田大五朗・ 水川喜文・ 秋谷直矩・柳町智治
２．発表標題 ダイバーシティ/ワークプレイス研究の論点整理 ――障害と共に働くこと
３．学会等名 第92回 日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yanagimachi, Tomoharu
２．発表標題 Moral dilemma of offering help or not: Micro-analysis of interaction among a person with cerebral palsy, train station staff and care professionals
３．学会等名 The British Association for Applied Linguistics Conference (BAAL2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 水川喜文，海老田大五朗
２．発表標題 障害者と／が、共に働くワークプレイスのエスノメソドロジー：　ダイバーシティにおけるカテゴリー・マネジメント
３．学会等名 第95回日本社会学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 海老田大五朗，水川喜文
２．発表標題 科学技術研究所における発達障害者のワークプレイスデザイン：　ダイバーシティとしての自律的共同実践
３．学会等名 第95回日本社会学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 海老田大五朗，水川喜文
２．発表標題 科学技術研究所で働く知的・発達障害者たち ―実験室のワークプレイスとダイバーシティ―
３．学会等名 第48回日本保健医療社会学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yanagimachi, T. & Yashima, M.
２．発表標題 Students' normative preference for being noticed by teachers over hailing them in private tutoring classes
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics (AAAL)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tomasine, J. & T. Yanagimachi
２．発表標題 Doing alignment and affiliation with repeat tokens during multilingual, video-based work meetings
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics (AAAL)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 南保輔・西澤 弘行・坂井田瑠衣・岡田光弘・佐藤貴宣・吉村雅樹・秋谷直矩
２．発表標題 視覚障害者の歩行訓練と複合感覚性:反響定位を中心に
３．学会等名 エスノメソドロジー・会話分析研究会例会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

1．著者名 海老田大五朗	4．発行年 2020年
2．出版社 ラグーナ出版	5．総ページ数 250
3．書名 デザインから考える障害者福祉ーミシンと砂時計ー	

1．著者名 海老田大五朗	4．発行年 2020年
2．出版社 ラグーナ出版	5．総ページ数 250
3．書名 デザインから考える障害者福祉－ミシンと砂時計	

1．著者名 梅崎修・池田心豪・藤本真・秋谷直矩ほか	4．発行年 2019年
2．出版社 中央経済社	5．総ページ数 260
3．書名 労働・職場調査ガイドブック――多様な手法で探索する働く人たちの世界	

1．著者名 山崎敬一、浜日出夫、小宮友根、田中博子、川島理恵、池田佳子、山崎晶子、池谷のぞみ、水川喜文、秋谷直矩ほか	4．発行年 2023年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 492
3．書名 エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック	

１．著者名 小宮、友根、黒嶋智美、早野薫、中村和生、水川喜文、五十嵐素子、須永将史、串田秀也ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 352
３．書名 実践の論理を描く：相互行為のなかの知識・身体・こころ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	秋谷　直矩 (Akiya Naonori) (10589998)	山口大学・国際総合科学部・講師 (15501)	
研究分担者	海老田　大五朗 (Ebita Daigoro) (50611604)	新潟青陵大学・福祉心理学部・准教授 (33109)	
研究分担者	柳町　智治 (Yanagimachi Tomoharu) (60301925)	北星学園大学・文学部・教授 (30106)	
研究分担者	荒野　侑甫 (Arano Yusuke) (70899872)	埼玉大学・人文社会科学研究科・学術研究員 (12401)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	トマシーン　ジョセフ (Tomasine Joseph)	北海道文教大学・国際学部・講師	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関